結語

以上の《現成公按》解釈によって、少しは初めの問いに答えを与えられたように思う。

打坐とはなにか。

分別し、思い量るような自己を止めにした、だが、竜が蟠るように気力が充実し、あらゆることに敏感に感応する精神がみなぎっている思惟としての坐禅。悟りを求めるのを止め、意味を求めるのを止め、あらゆる求めることを止めて、そういう功夫の中で、仏と同じ姿をとり、今ここに安坐して、それをやり続けることだけが大切である坐禅。それが非思量としての打坐であろう。

悟りとはなにか。

その非思量の打坐、打坐の思惟において〈現成〉している事態が、悟りにほかならず、それを道元は一気に〈現成公按〉と名指したのだ。それは私に属することではなく、仏、法に属することである。また、それは覚知や言表を超えていると同時に、「放てば手にみてり。一多のきわならむや」（『弁道話』）といわれるように、無限の言説に開かれていく。非思量の打坐を行ずることは、同時に無限の言説を使うものであり、『眼蔵』に参ずることも、そのひとつであろう。だが、言葉であらわされたものは、打坐からの思惟、あるいは打坐への思惟として、この《現成公按》解釈も、もちろん〈しばらく〉このように〈みゆるのみ〉である。

仏法とは何か。

それは私の救いというよりも、人類の救いというよりも、〈大地の黄金なるを現成せしめ〉るものなのだ。人間が見聞きし分かる一切そのままではなく、ただそのままに一切を仏光明で荘厳し、私の全生活を荘厳するものだ。

道元はこの巻では何も触れていないが、本当に一切の日常生活を、どう浄め光らせていくかを、じつに細かく説いている。

朝起きれば、どうトイレの用を済ますか《洗浄》、どう顔や体を洗うか《洗面》、どう食事の支度をするか『典座教訓』、どう食事をして、後始末をするか『赴粥飯法』、どう目上の人に接するか《陀羅尼》・『対大己法』、どう仲間と共同生活を送るか《安居》『衆寮箴規』『知事清規』、どう衣服を作り、どう着るか《伝衣》《袈裟功徳》、どのように坐禅堂で坐禅するか《坐禅箴》《坐禅儀》『辨道法』、どう寝るか『辨道法』、仏弟子のあらゆる生活場面での在り方を説いている。

はじめて沢木老師に出会った日、接心（集中して坐禅する会）が行われており、雲水の方々と食事をともにした。それはまさに日常生活の聖化であり、生きることそのものの深化として、未熟なわたしの目を見張らせるものであった。それ以来、遺弟の方々に指導され、不器用ながらその道を学びつつある。

しかしそれだけでない。打坐は同時にあらゆる存在を浄化するのである。これは現在私達人間の迷いの生活、便利を求め快楽を求める思惟が、あらゆる存在を汚染していることと思い合わせれば、深くうなずけることではあるまいか。

地球の危機の今こそ、仏道に目覚める好機である。

環境問題を憂える全世界の運動は、いまや人間自身の変革、その生活の仕方を変えることが、地球を滅びさせない唯一の道であるという認識に至りはじめている。

その意味するところは深い。けっして原始に帰れとか、近代以前の生活を目指せとか言っているのではない。昔の生活も迷であることに変わりはない。そうではなく、人間の技術や知恵に頼るのを止め、生きることを静かに深め、浄める方向しかない。そのとき同時に、山河大地日月星辰が浄められ、環境はふたたび取り戻されよう。仏のみが世界を回復させる。

山河大地を破壊し、動物植物を死滅させ、人間自身を家畜化し、管理し、人間・生類の大量殺戮をもする人間、このどうしようもない人間が、打坐においてのみ仏として荘厳されるのである。

そして一人の坐禅でも、一切の人間とあらゆる存在を、いのち響きあうもの、きよらかな存在へと向かわせるだろう。

こうして書いてみれば、坐禅も、悟りも、仏法も、正信をもってひたすら坐り、生活を浄めるという単純なことに尽きるので、ひどく余分なことだったような気もする。

多くの諸先輩の解釈を批判してしまい、冷汗一斗の思いである。人格や修行ということになれば、足元にも及ばない私が、大切な方々を難じてしまい、さみしさが体の中を吹き抜ける。若輩の未熟がなさしめたもので、伏してご寛恕をお願いしたい。

ただ願わくば、多くの方がまことの打坐の思惟へ参ずる一助になれば、と念じるのみである。